
詩集：哀しみの河

パキ夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩集：哀しみの河

【Nコード】

N3944B

【作者名】

パキ夫

【あらすじ】

暗い。文字制限によりアップできないもの多数。明るい世界はきっと僕には縁がない。

輪っか

カラカラカラカラ……
カラカラカラカラ……

僕の胸の中空にある輪っかは
静かに音を立てて回り続ける

カラカラカラカラ……
カラカラカラカラ……

その音はいつも虚しく
その動きはいつも同じく

カラカラカラカラ……
カラカラカラカラ……

いつまで回るといふのだろう
いつまでも同じ所で回り続ける

それはきつと僕の心で
それはきつと僕の弱さで

カラカラカラカラ……
カラカラカラカラ……

同じ事のくり返し
永遠に前に進まない行為

カラカラカラカラ……
カラカラカラカラ……

止めようとすれば止まるのだろうか
変えようとすれば変わるのだろうか

それは僕の心次第
僕が決めれば変わるだろう

カラカラカラカラ……
カラカラカラカラ……

でも僕は何もせずに
じっとその音だけを聞いている

直視する勇氣もなく
その音だけを聞いている

カラカラカラカラ……
カラカラカラカラ……

だつてきつと何も変わらない
僕が何をしても変わらない

一時その回転が止まったとしても
いつかまた動き出すだろう

一時その動きが変わったとしても
いつか元の動きに戻るだろう

カラカラカラカラ……
カラカラカラカラ……

僕の胸の中空にある輪っか
中には何も入ってない輪っか

カラカラカラカラ……
カラカラカラカラ……

カラカラカラカラ……
カラカラカラカラ……

居場所

僕は どこに行けばいいんですか？

僕は ここにいていいんですか？

僕は 何をすればいいんですか？

僕は 何もしなくていいんですか？

街の雑踏の中で みんなどこかへ向かっている

街の喧騒の中で みんな何かをしている

僕はその中で 一人混乱している

僕の居場所は とても不安定で頼りなく

僕は すがりつく場所を探している

自分の力で しつかりと立てる所を探している

二本の足で 踏みしめられる所を探している

友人と一緒にいても 僕はやっぱり一人きり

誰と一緒にいても 心は孤独にさいなまれてる

表面上は 平気に見せてる

心配なんて かけたくないから

心は冷たく凍てついて 誰も触ることが出来ない

心は虚ろに穴が開き 誰も埋めることが出来ない

孤独は いつもそこにいた

そこから僕は 必死に目を背けていた

でも今その事実が 僕の眼前につきつけられ

僕はそのあまりの暗さに 半ば絶望している

孤独と 友達になればいいんだらうか？

孤独を 制御できればいいんだらうか？

僕には できやしない

僕は 弱い人間だから

そんな事 できやしない

僕の心は 居場所を探している

それは とても暖かく

それは とても柔らかく

僕の心を 安らげてくれる

そんな居場所は あるんだらうか？

そんな理想郷は あるんだらうか？

それは 確かに存在する

僕はその間に 身を置いたこともある

でも僕は 知っている

その場所は 永遠ではなく

いつかは なくなってしまうということ

僕はその事実を 僕自身の経験から

痛いほど身にしみて 知っている

そしてその場所から 放り出された時の

どうしようもないくらいに 哀しさも

気が狂いそうなほどの 寂しさも

僕はもう十分身にしてみても 知っているんだ

でも僕は今 その温もりを探して
ふらふらと 歩いている

その温もりは 一時しのぎだって知ってるけど
それでも 探している

どこに行けば 見つかるのか？
何をすれば 見つかるのか？
そんなことは 分からない

ただ 探すだけ
それだけ

見つからなかったら それは
この世界に 僕の居場所がないってこと

そしたら僕は きっと
他の世界に 行くんだろう

時計

君から貰った時計、覚えてるかい？

ほら、僕の誕生日にくれた時計さ。

君が僕にくれた最初に最後のプレゼント。

君の思いが詰まっているプレゼント。

僕は、愛用していたよ。凄く大事にしたた。

結局僕たちは別れてしまったけど、

二人の気持ちは変わってしまったけれど、

君がこの時計を買った時は、僕のことを思ってくれていた。

僕はそう考えてる。

でも、その時計が壊れてしまった。

突然画面が消えてしまった。

時計屋に持って行って、一度は直ったものの、

また壊れて動かなくなった。

僕は少し悲しくなって、もう一度修理を頼んだ。

でも、それは修理じゃなかった。

メーカーに送って、中のムーブメントを全部交換したんだ。

もう、この時計は、君のくれた時計じゃない。

外見は同じだけど、僕がつけた傷も残っているけれど、

中身は全く別のもの。君がくれたのとは別のもの。

僕は少し後悔しているんだ。

時計を修理に出すべきじゃなかった。

君がくれたままの形で、君が僕にくれた時計のまま、

静かに引出しの中にも眠らせておくべきだった。

君と別れてもう何年だろう？

そろそろこの時計とも、別れるべきだったのかもしれないね。

でも、時計は直った。

僕はこの時計、使うよ。

でも、君のことは、あまり思い出さないだろうね。

それって、どういう事なんだろうね。

大人になるって、こういう事なのかな。

もし、そうだとしたら、少し哀しいね。

煙草

私は、一本の煙草になりたい。

一本の、ただの紙巻き煙草になりたい。

どこにでもある煙草になりたい。

細く、白い、棒状の物体になりたい。

一個の製品であればいい。優劣などなくていい。

煙草以上の存在を目指さなくていい。

煙草以下の存在に堕ちなくていい。

ただの、普通の、それでいて完成された、一個の物体でいい。

希望などなくていい。絶望などなくていい。

夢などなくていい。諦めなどなくていい。

喜びなどなくていい。悲しみなどなくていい。

楽しみなどなくていい。苦しみなどなくていい。

感情などなくていい。心などなくていい。

肉親などなくていい。子供などなくていい。

兄弟などなくていい。家族などなくていい。

知人などなくていい。友人などなくていい。

親友などなくていい。恋人などなくていい。

他者などなくていい。自己などなくていい。

誰かが火を点ければいい。じわじわと燃えていけばいい。
派手に輝かなくていい。地味に消えなくていい。
ただ時の経過にしたがつて、少しずつ無くなっていけばいい。
燃えて、灰になって、その灰が地に落ち
風に吹かれて土に混じり、静かに消えていけばいい。

誰かが火を点けなくてもいい。捨てられてもいい。
折れ曲がり、必要とされず、地に捨てられるならそれでいい。
捨てられ、踏まれ、ちぎれ、汚れ、
雨に濡れ、日に乾き、ただのゴミ屑のようになり、
風に吹かれて土に混じり、静かに消えていけばいい。

使命などなくていい。責任などなくていい。
役に立たなくていい。意味などなくていい。

全ての事柄はなくていい。

私は、一本の煙草になりたい。
茶色の葉と白く薄い紙で作られた、か細き煙草になりたい。

空間

ねえ、僕は孤独だ。

ねえ、僕は自分だけの空間が欲しい。

自分だけの居場所が欲しい。

自分がいるべき場所が欲しい。

僕は孤独を探してる。

僕は自分だけの空間を探してる。

孤独というのは箱に似ている。

小さな小さな箱に似ている。

もともとその箱は大きかった。

もともっと大きな箱だった。

他人が入ってこれるくらい。

それくらい大きな箱だった。

でも誰も入ってこなかった。

いつまで待っても来なかった。

その箱は僕一人には大きすぎた。

広くて居心地が悪かった。

僕はその箱の脇に寄った。

箱の真ん中からずれて座った。

余分な空間が目障りだった。

要らない場所が気に食わなかった。

だから僕はそこを切った。
いらぬ空間を切って捨てた。
少し居心地が良くなった。
幾分気分が良くなった。

後はその繰り返しさ。
端に寄る、空いた空間が気になる、
それを切る、捨てる。

そうして箱は小さくなった。
随分随分小さくなった。
今では僕が座るだけ。
膝を抱えて壁にもたれて、
それだけで精一杯の大きささ。

誰かが入ってこようとしても、
僕がいるだけで精一杯だから、
結局誰も入ってこれない。

でも勘違いしないでくれよ。
僕はこの箱が好きなんだ。
とつても小さくて、とつても窮屈。
だけどこの箱が好きなんだ。

僕はここだとくつろげる。
僕はここだと安らげる。
僕にはこの場所が合っていて、
この場所も僕に合っている。

だから僕はここにいる。
ここにいたいからここにいる。

きっと誰もがそんな場所を持つてて、
きっと誰もがそこを大切にしている。

ねえ僕は孤独だ。

ねえ僕は自分だけの空間にいる。

世界

お前の世界を教えてくださいよ

お前の世界を教えてくださいよ

お前の世界と繋がりたいたいから

お前の世界を教えてくださいよ

何が好きか教えてくださいよ

何が嫌いか教えてくださいよ

何が正しいか教えてくださいよ

何が間違ってるか教えてくださいよ

お前の世界を教えてくださいよ

お前の世界を教えてくださいよ

お前の世界を分かりたいから

お前の世界を教えてくださいよ

何処から来たか教えてくださいよ

何処に行くのか教えてくださいよ

何を得たのか教えてくださいよ

何を失ったか教えてくださいよ

オレは「ヒト」が知りたいんだ

お前という「ヒト」が知りたいんだ

お前という「ヒト」を知ると同時に

オレという「ヒト」を見つめたいんだ

海がしずくからなるように

空が一つであるように

ちっぽけな世界は連なつて
もつと大きな何かになる

そんな大きな何かの中で
オレとお前の世界の果ては
回りまわつて繋がつてる
薄いながらも繋がつてる

お前の世界と繋がつて
オレはお前の世界に行ける
お前の世界を理解できたら
きつとオレの世界は広がる

お前はオレの世界に入つて
オレはお前の世界に入る
その境目はぼやけていつて
オレとお前は一つになれる

途切れることもなしに
気づかぬこともなしに
オレとお前の世界の間
確固たるラインが引かれる

そのラインが強固になつて
オレとお前が等しくなれば
オレとお前の世界の時間は
同じ時を刻んでいける

お前の世界を教えてくださいよ
お前の世界を教えてくださいよ

お前の世界を分かりたいから
お前の世界を教えてくださいよ

お前の世界を教えてくださいよ
お前の世界を教えてくださいよ
お前の世界と歩みたいから
お前の世界を教えてくださいよ

エンドレス

オレは、きつとこれからもそうするんだろつ。
そうして生きていくんだろつ。

後になってから気づくんだろつ。
失ってから気づくんだろつ。

後になってから悔やむんだろつ。
なくしてから哀しむんだろつ。

それは、最早遅すぎる覚醒なのに。

自己嫌悪に陥るんだろつ。

自分を消し去りたいと願うんだろつ。

でも何もしないんだろつ。

しようとしてもできないんだろつ。

それは、単なる逃げだと知っているから。

泣こうとしても泣けないんだろつ。

笑おうとしても笑えないんだろつ。

表面上は取り繕うんだろつ。

見た目だけはマトモに見せるんだろつ。

それは、自分の無様さをさらけ出したくないから。

そして時間は経つんだろう。

毎日がいつの間にか通り過ぎていくんだろう。

少しずつ忘れていくんだろう。

思い出そうとしても思い出せなくなるんだろう。

それを哀しく思うんだろう。

それを寂しく思うんだろう。

でも、それを積極的に食い止めるような努力はせずに。

そして人生は続くんだろう。

時間が全てを薄めるんだろう。

死にたいような辛さも忘れるんだろう。

踊りたいような楽しさも忘れるんだろう。

それが、麻痺だという事に気づかずに。

そして何もなかったような顔をして、

同じ事をまた繰り返すんだろう。

へヴィ・メタルを聴くのさ

若き頃の僕を忘れないために
僕はへヴィ・メタルを聴くのさ

自分に自信が持てず
いたずらに他者を傷つける事で
自分を特殊な存在だと思い込もうとし
相対的に
自分の価値を上げようとし
そうやって
自分の存在を正当化しようとした

しかしながら他者を傷つける事は
現代の法整備の下では
厳格に処罰される行為であり
罰則を受けることを恐れて
傷つけられる事を恐れて
自らの欲望の赴くままに
他者を傷つけることはできなかつた

そんなフラストレーションを
いくらかでも解消するため
若き日の僕は
ひたすらに攻撃的な
へヴィ・メタルを好んで聴いていた

陳腐で青臭く
臆病で卑怯な

屈折した人間である僕は
ただひたすらに
へヴィ・メタルを聴いていた

今はそれが

その憤りともいえる感情が
静かに冷えて固まっ
ていて
それを

たまに悲しく思い

あの頃の

惨めだが鈍く光っていた
鬱積した感情の塊を

思い出したくて

肌で感じたくて

へヴィ・メタルに身を任せるのさ

何かをしたくても

それが何だか分からなくて

何をすればいいのかわからなくて

自分が何をしたいのかわからなくて

それでも

何かをしたいという気持ちだけはあって

何もできないくせに

それを認めたくないという意地があって

そんな若き日の

無力感溢れる意志の欠片を

取り戻したいと願いながら

今の薄汚れた僕は

キラキラと下品に輝く

ヘヴィ・メタルを聴くのさ

ある人へ

君は、僕の事を好きになつてはいけない。

君のような人が、僕ごときを好きになつてはいけない。

君と僕とは棲む世界が違うのだから。

身分の上下だとか貧富の差だとか職業の貴賤などは、近代において、また本当の意味での恋愛において、全く重要なことではない。そういう意味で、君と僕が不釣り合いだと言つてるのではない。

眞実の恋愛とは、人が、ある人の人間性、その信念、思想、人格などをもつてして好ましく思い、尊敬することによって成り立つものだ。

もちろん相互がそう思わなければいけない。

片方だけが思ふのでは、それは片思いと呼ばれる類に属する。

君は、素晴らしい人だ。

人が考えうる最高の人間の状態を聖人と呼ぶならば、もちろん君はそのような人物ではない。

もっとも、この世界に溢れる人々の誰しもが、そういう状態にはなれない。

だがしかし、君は、僕が出会つた数多の人々の中でも、その品位が高いほうに属していると僕は考えている。

そのような君に愛される資格は、僕にはない。

僕は、君が思っているよりも、ずっとずっと下劣な人間だ。

下劣で、愚鈍で、脆弱な人間だ。

人に貶められ、人に軽んじられ、人から疎まれ、人から憎まれてきた人間だ。

そして同様に、人を貶み、人を軽んじ、人を疎み、人を憎んできた人間だ。

これは、心根が卑しいからそうなるのだ。
僕という人間の根っこの部分が卑しいからそうなっているのだ。
そんな人を好きになつてはいけない。

君は、僕が知る限りでは日の当たる処を生きてきた人間だ。

まれに日が曇る事があつたとしても、大半は日が照っていたはずだ。

だが、僕は違う。

僕の人生の大半は日の当たらない処だった。

まれに日が射す事はあつても、大体は暗かった。

君が想像しているより、僕の心はずっと暗い。暗くて、そして冷たい。

闇が何たるかを知るにはその闇の深さに潜る必要がある。

君は、君の闇は、月夜のようなものだと思つて。

完全な暗闇ではなく、どこか救いのある闇だったはずだ。

そして僕の心はそれよりもずっと暗いのだ。

月のない夜のように、全くの暗闇なのだ。

そんな僕の心を君は知る事ができないし、よしんば知つたとしても、君にはとても耐えられないだらうと思つて。

君は、光射す人を好きになるべきだ。

世の中には光射す人生を歩んだ邪な人物が居る事も事実だが、同時に善なる人も存在するのだ。

君の相手はそのような人がふさわしい。

君が愛するべきは、そのような人なのだ。

だから、君は僕の事を好きになつてはいけない。そして僕を美化してもいけない。

君は君の目で、君にふさわしい人を選ぶべきだ。

僕の意見や思想に惑わされず、君は君の価値判断で人を見るべきだ。

その結果君が誰を選ぶのが、僕は嫉妬や軽蔑などしない。君が選ぶ人間なら間違いはないであろうと信じている。

だが、僕は君に愛さるる人間ではない。それだけは真実だ。

朦朧

夢を見た。

夢の中で2回死んだ。

起きた。

目覚めは存外早かった。

水の代わりに酒を飲んだ。

飯の代わりに煙草を吸った。

煙草の燃え方をずっと眺めていた。

赤い火口が一周して戻って来た。

自分はなんて遠くに来たんだろうと思った。

昔考えた将来像はとっくの昔に消え去った。

そこにはただ独りの男がいた。

独りきりの男がいた。

自分はこれからもっと遠くに行くんだろうか？

自分の立っている場所はどこなんだろうか？

そこにはただ独りの男がいた。

独りきりの男がいた。

昔熱中していた音楽を聴いた。

今熱中している音楽を聴いた。

現在と過去を結ぼうとした。
点を線で繋ごうとした。

そこにはいつも空白があった。
線はまっすぐではなかった。

深夜にテレビで映画を見るのが好きだった。
夜は独りきりである事を正当化してくれた。

そして今も独りきり。
もはや夜は正当化の手段になりえなかった。

潮時だった。
動き出す時だった。

しかし…。
だが…。

夜は全てを包み込んだ。
夜に全てをゆだねた。

どこに行こうとしているんだろう？
どこに行きたかったんだろう？

考えても答えは出なかった。
夜だけが味方だった。

そして夜が明ける。
それに何の意味がある？

意味を探して夜に逃げた。
どこへ？

逃げ場所なぞなかった。
わかりきった答えだった。

そして今日も彷徨っている。
夜の中で彷徨っている。

ハローCQ

眩しい程に 空が晴れた日
透き通る程に 風が清い日
そんな完全な一日の夜に
その完全さは失われ
それは 嬉しい程に残酷だ

優しく静かに 真実を伝えようと
透徹した空気が 余剰を削ぎ落とす
完全さは既に失われ
不完全さが完成する
残余の存在は 偽らざる自己だ

ハローCQ この世は悲しみで出来ている

冬の気は 清らかに美しい
寒さの厳しさは 無用さの否定か
無用の多き不完全は
完全を求めていく
否定による自己肯定の矛盾さよ

大気に舞い散るは 万人の憂い
何も考えずとも 肺は確実に機能し
そこに吸い込まれた風には
粒状の憂鬱が入っている
生存の副産物 理外の思念

ハローCQ この世は苦しみで出来ている

世界が二元論であれば どんなに単純な事だろう？
思考を二極化できれば どんなに簡単な事だろう？
苦しみは生きる為か？ 生存は苦しむ為か？
楽しみは生きる為か？ 生存は楽しむ為か？
楽しみは苦しみか？ 苦しみは楽しみか？

厳格な自然は 甘えを拒絶する

人間と自然 相互理解なぞ不可能だ

自然には博愛なぞない

自然には慈愛なぞない

傍観の中で秩序が作られ 秩序は美を創る

矮小な人間は 小賢しく巡る

秩序を混沌させ 仮面で装う

秩序の混乱は 美を損ねていく

秩序の混乱は 美を殺していく

不自然の強行 理外の論理

ハローCQ この世は悲しみで出来ている

世界が完璧な世界なら 世界は世界ではない
完璧な世界なんてものは この世界にはない

ハローCQ この世は悲しみで出来ている

ハローCQ この世は苦しみで出来ている

ハローCQ この世は悲しみで出来ている

そして誰にも止める事はできないんだ

諦観

昔は 何の気がねもなく 言えた言葉がある
何の遠慮も 気遣いもなく 言えた言葉がある

昔は なかなか言えなかった言葉がある
言った後の事を考え 言うのを恐れた言葉がある

前者は 主に友人に
後者は 主に恋人に

それが
今では 言えなくなった
今では 言えるようになった

友人に気を遣い始めた 言葉を選んだ
恋人を思いやらなくなった 言葉をぶつけた

いつの間にか 自らの中で何かを得て
それと同時に 自らの中で何かを失い
その結果として 自らの中で何かが残り
最後に 自らの中で何かが変わった

そして
今では言えなくなった自らの意志を
熱い溶岩のような魂のこもった言葉を

それは 年をとったためなのか
それは 切磋琢磨を恐れているのか

分からぬまま ただ

それが 冷たくなつていくのを 眺めている
じつと 死に向かつているのを 眺めている

そして

今では言えるようになった陳腐な言葉を
うわべだけで魂のこもっていない言葉を

それは 年をとつたためなのか

それは 処世術を身につけたからなのか

分からぬまま ただ

それが 無駄に騒いでいるのを 眺めている
騒ぎ 得しようとして動いているのを 眺めている

しかし 僕は ただ

それが 悪い事なのか それが いい事なのか
全く 考える 気力もなく

対岸の火事を 単なる好奇心から 見るように
ただ ぼうつと 眺めている

「どつちだつていいのさ 大して変わりはない」
そうした 諦めの心境を持って

ただ ぼうつと 眺めている

FOR SALE

ある日古道具屋の店先で
僕の右腕が売られてた
人違いかと思つたが
爪の切り方や曲がり具合
転んで怪我した傷跡まで
どこからどう見ても僕の腕だ

相場よりずいぶん安い値段
青っ白い僕の腕は
そんなに評価は高くない
「あの、これって……」と
店の主人に聞こうとしたが
僕の右手は売られているので
指差す事が出来なかつた

そしてそれから数日後
古道具屋の店先で
僕の左足が売られてた
一体誰が売つたのか
皆目見当がつかないが
相場より少し高かつたので
僕はちよつと安心して
杖つきながら家路についた
片足で動くのは億劫なので
ずっと家にこもっていたら
友達から電話があつた

動く左手で受話器を取ると

開口一番友は言った

「お前の脳みそが売られてたぜ

値段は中古のパソコンぐらい」

僕はそれがどういふ事なのか

理解しようとしたけれど

頭がうまく働かないので

お礼を言っただけ電話を切った

あれから数日経つけれど

何も考えが浮かばない

考えが浮かばないと言っより

僕はもういない気がする

その頃古道具屋の店先には

「FOR SALE」の赤文字が

「在庫処分のフルセット！

まとめてお安く致します」

まとめて売られる金額は

僕を育てるのにかかった金額より

ずっと ずっと安く

僕の親はそれを見て

悲しく涙を流しました

軒先でさんざん泣いた後で

店に入って購入手続き

値引き交渉までもして

再び僕を手に入れました

今度はもっと高くしようと

帰り道で話し合い

またガラクタをつかまされたとは知らず
未来に夢を持ちました

meaning of life

人間の価値とか、人生の意味とか、そんなの探してどうにかなるもんじゃない。

人は、生きているだけで意味がある。

生きて、そこにいる事。

他者に存在を感じさせること。

横で呼吸をしている事。

それだけで、意味があるんだ。

横に物じゃなくって人がいる。

そこから息づく体温を感じる。

多分、基本はそれだけだよ。

そこからはその人次第。

他者に危害を加えたり、不快感を与えたりもできるね。

逆に他者を喜ばせたり、快感を与えたりもできる。

でも、その価値の是非や、意味の有無だとかは、あんまり言いたくないんだ。

受け取る人それぞれだし、与える人それぞれだと思う。

まあ、それを最大公約数的にしたのがモラルとかだと思うけどね。

根本的には、そこにいる事。

世界の中に、しっかりと存在している事。

この空間の中で、一定のスペースを占めて、さらにそれが変化する事。

呼吸をするだけで大気が変わって、風が吹いて、そこからいろんな

事が変化していく。

望むと望まざるとにかかわらずにね。

生きるって、結局そういう事じゃないかって思うよ。

でも、それは最低限だからね。

そこからどうしていくか、どうしたいか、それを考えて実行して、ダメなら他を考えて……そういう試行錯誤が人生になって思う。

正解とかないし、こうしなきゃいけないってのものない。

ま、社会で生きていくにはルールがあつて、それを守らなきゃいけないけど。

あんまり難しく考えないで、とりあえず自分がしたい事を、あれこれ考える前にやればいい。

腹が減つたら飯食つて、眠くなつたら眠るんだ。

好きな人には好きって言つて、嫌いな人とは距離を置く。

嫌な事は嫌って言つて、素敵な事には拍手する。

それで、いいよ。

count

携帯電話を出してごらん。そしてアドレス帳を開くんだ。
何件入ってる？

100件？ 200件？ 300件？

大したもんだよ。

友人、知人、恋人、家族、同僚……。

君はそんなにも広い人間関係を持っているんだね。

君が今までの人生で築いてきた人間関係が、そこに集約されているよ。

さて、ここで質問。

その内、君が死んだら泣いてくれる人は何人いるのかな？

さあ、数えてごらん？

何人残った？

10人？ 20人？ 30人？

それはなかなかのもんだね。

その人たちの中では、きつと君は涙をこぼすに足る人物だったんだよ。

君の死が、君の不在が、その人に涙を流させたんだよ。

では、質問を続けるよ。

最後の質問だ。

君が死んだ後、10年、20年、いや、その人が死ぬまで、君の事をちよくちよく思い出してくれる人は何人いるのかな？

その人が死ぬまで、毎年墓参りに来てくれる人間は何人いるのかな？
折にふれて、君の死後も君を想ってくれる人は何人いるのかな？

葬式の時の涙なんて、あてにならないさ。

そんなの、悲しんでる自分に酔ってるだけだからね。

その場の雰囲気もあるし、功利的な落涙かもしれない。

大事なのは、いつまで経っても覚えてて、ふと思い出してくれる人間、本当の意味での親友だよ。

君といつまでも共に生きたいと思ってくれる人間、そしてそれを行動に移してくれる人物だよ。

さあ、何人いる？

絶対に確信がなきゃ数えちゃダメだぜ？

君の生きた証を残してくれる人は何人？

君の人生を紡ぐ人は何人いるんだい？

さあ……。

さあ………。

蝉

蝉の死骸を見た。

たった一夏の、いや、たった一週間の寿命が尽きて、木から落ちた蝉の死骸を見た。

それは、いつ死んだんだろう？

落ちたときに壊れたのか、それとも他の虫に食われたのか、その昆虫の腹は、半ば欠けていた。

半ば欠けて、その空虚な腹腔を露わにしていた。

その内部は、予想よりずっとがらんどろで、何もなかった。何も。

あんなに喧しく、あんなにけたたましく、あんなに巨大な鳴き声を発していたのに、それを出す器官はひどくちつぽけで、みすぼらしかった。

なぜ、こんな体なのだろう？

なぜ、もつと他に、体内のスペースを割かないのだろう？

筋力だとかに割けば、小動物に襲われる危険も減っただろう。

脳に割けば、様々な苦勞が減っただろう。

生命維持に割けば、彼は一週間を越える寿命を持っただろう。

なぜ彼は、彼らは、大体の器官において必要最低限の機能しかもたず、そしてその体の大半を、大音量を出すことに用いたのだろう？

それは、蝉の性なんだろうか。

そついう、ある種「愚か」にも見える進化の結果が、蝉の求めた物なんだろうか。

だとしたら、僕なんぞが、何かを賭して他の何かを求めることもせず、ただ安穩と生きている僕なんぞが、自らの意志で生をまっとう

している彼を「愚か」などと思うのは、はなはだ傲岸不遜ではなからうか。

そして僕は、この僕は、そんな生を全うした蝉が、とてつもなく高貴に見えたんだ。

とてつもなく美しく、見えたんだ。

僕がまだクソ生意気なガキだった頃

昔、僕がまだクソ生意気な（今もかもしれない）ガキだった頃。

僕はその生意気な態度のせいで、時々人から反感を買ったし、怒られたし、肉体的な損傷も受けた。

まだ若い僕はそのたびに反抗し、反論し、食ってかかった。

クソひねくれていたし（今もかもしれない）、自分の言い分で相手をやりこめたいというサディスティックな自尊心を満足させたくもあつた。

当時の僕は頭が悪く、今考えてみれば相手の言い分のほうが正しかったこともままあるし、当時の自分の論拠が本質からずれた浅薄なものだったこともある。

でも、若き僕の言い分のいくつかは、相手に否定された、理由も知らされずに否定された言い分のいくつかは、今考えても正しく、自分が間違っていなかったと思う。

しかし僕は否定された。否定され、屈服させられた。暴力で、権力で、その他の力で。

僕はそういう相手を嫌悪した。殺したいほど嫌悪した。しかし僕には力がなかった。屈服し、隷属するしかなかった。

でもそれは僕にとってはとても屈辱的で、とても卑しく、とても醜く、相手を嫌悪するのと同程度に自分を嫌悪できる行いだつた。

恫喝に屈してしまう自分は、相手の理不尽さと同じく嫌悪の対象だつた。

僕は思った。将来僕がなんらかの力を持ったとき、けっしてこのような人間にはなるまいと。暴力を背景に、理不尽さとエゴイズムをふりまくことはしまいと。

月日が経って僕は成長し、ある種の力を持った。背景にちらつかせることのできる力を持った。

では、僕は若き日の誓いを実践できているのか？

そう自己に問うた時、胸を張って「もちろんだ」と言えない自分が、とても恥ずかしい。

涙滴

近親者にあるトラブルがあつて
他人に迷惑をかけるまでになつたので
おろおろする家族を尻目に
最も若い僕が一切を切り盛りした

その後

全てが一応の落ち着きをみせて
まあ今後どうなるかは状況次第なんだけど
とりあえずちよつとした結末になつて

その後誰かと無性に話したくなつて
昔からの友人の家に行つて
事の顛末を全て話し
それを話し終えた時

涙が

ひとしずく

こぼれた

別に哀しいわけでもなく
別に憐れむわけでもなく
別に嬉しいわけでもなく
ただ無感動に

嗚咽もなく

顔もゆがまず

目はうつろなままで

表情の変化もなく

涙が

頬を伝って

流れた

その時

「ああ、今まで張り詰めていた気が
やっと緩んだんだな」
と思った

楽になったと言えば楽になったんだろう
ただ、それがいつまで続くのかは分からない
例のトラブルだって
いつまたどうなるとも分からないのだから

誰の為に泣いた涙なんだろう？
もう僕は、自分の為には泣けないと思っていたから
やはり誰かの為なんだろうか？

それとも

僕は自分の為に泣けるように
あの昔の感情豊かな頃の僕に
なっただろうか？

分からないが

僕のその無様な姿を

そっと見守ってくれた友人に

僕はただ感謝する

何も言わず

何も変わらず

そっと側にいてくれた友人の姿を

僕はいつまでも覚えてる

酩酊

上下が分からない。

内外が分からない。

U p s i d e d o w n .

I n s i d e o u t .

足が頭で天井が地べただ。

体の中に大気が詰まって体の外は肉の壁。

「なあ、この壁にドアはあるのかい？」

頭は脈動と共に締め付けられる。

なぜこつも血液は勇ましい？

自らの肉体でさえ、僕は意のままにできないのか？

吐き気が襲うが吐けはしない。

僕の胃の腑を掴むのは誰だ？

よろよろと便器にかがみこむ自分の姿をしてみるよ。

眠れない。

目が冴えて脳内はそれ以上に冴える。

現在の事から過去の事へ。

過去の過ちへ。過去の罪へ。

終わった事を掘り返してはそれを材料に自らを責める。

責める材料を探す自分に気づき、それを元にまた責める。

1秒が10秒ぐらいに感じる。

煙草が灰になるのが遅い。

H e y , G o d .

この調子だとどうやら人生は千年以上になるらしいぜ。
でもその長さにきつと価値なんてないんだろつな。

生を自覚するために痛みがあるのか？

痛みなき生は死なのか？

死とは痛みから解放されることなのか？

ハラショー。そいつはなんてユートピアだ。

「ハロー。生きてる？」

「心臓が動いている状態を生きていると言つのなら、生きてるよ」

T h a t ' s a l l .

I ' l l b e a l r i g h t .

美德

真面目というのは美德ではないし、賢いということも美德ではない。この社会においてそういう性質を持つている人が希少であるがために、それは美德のように思われているが、それはとりもおさず、それ以外の不真面目で愚鈍な人々が世に満ち溢れていることを指す。つまり、そんな社会で生きていくという点に限っては、真面目さや賢さというのは単なる重荷でしかないのだ。

「クソ真面目」「小賢しい」という言葉が存在するように、それは時としてある種の僻みを持って嘲笑されるべき事柄に成り下がるのだ。

もちろん、人間の本質、人格という点では真面目さや賢さは美德である。

しかし悲しいかな、美しいものが有用であるとは限らない。むしろ、美しさと実用性は相反する存在なのだ。

真面目さと賢さについてのみならず、他の美德と呼ばれる全ての性質について、同様のことが言える。

美德は、容易く手に入らず、万人が有していないがために美德なのであり、万人を対象とした社会で生きていくには、それは疎んじられる危険性をはらんでいるのだ。

よいか、美しき心の持ち主よ。

それらは本来綺麗なもので、それを有することをなんら恥じ入る必要はなく、むしろ賞賛されるべきことなのだ。

しかしこの世では、なるだけそれを隠せ。

この汚い世の中では、その光をそっと覆え。

だが、心配するな。

この世は薄汚れているが、全てがそうではない。
貴方のような美しい心の持ち主だっている。
そういう人に巡り合えたら、そういう社会に属せたら、貴方はそ
の覆いを外せばいい。
その機会は、きっと、ある。

覚醒

心に傷をつけましょう。

眠った心を起こしましょう。

ぬるま湯に浸りきった、

妥協に屈しきった、

醜悪に肥えた心にメスを入れましょう。

眠り続けて成長はありますか？

眠り続けて何かを学べますか？

眠りなんてのは夢なんです。

何でも叶う世界です。

眠った心を傷つけましょう。

傷をつけて起こしましょう。

さらなる心の成長のために。

虐げられましょう。

侮られましょう。

苛められましょう。

蔑まれましょう。

辱められましょう。

嘲られましょう。

知り合いに、友人に、親友に、

先輩に、後輩に、先生に、

恋人に、家族に、わが子に、

見知らぬ人に、蔑む人に、崇める人に、

そしてなにより自分自身に。

心を起こしましょう。

覚醒させましょう。

君がさらなる君になるために。

ただし、やりすぎはいけません。

肉体を傷つけすぎると死に至るように、

精神を傷つけすぎても死に至ります。

なにこともほどほどが肝要です。

さあ、心を傷つけましょう。

君が強くなりたいのなら、

君が大きくなりたいのなら、

進んで心を傷つけましょう。

ピエロ

僕はピエロ 人を笑わせるのが仕事
おどけたポーズでダンスを踊って
みんなを楽しくさせるのさ

僕はピエロ 人を笑わせる人形
人格なんて必要ない
思考なんて必要ない
みんなが笑えばそれでいい

僕はピエロ だからみんな笑ってよ
みんな僕を笑ってよ
みんなが笑ってくれないと
僕の居場所がないだろう？

僕はピエロ 今日もみんなを笑わせる
もう何人笑ってくれた？
数え切れないくらいだね
あと何人残ってる？

僕はピエロ なんだか体が動かない
歯車軋んでやな音立てる
これじゃあ笑ってもらえない
これじゃあ居場所がなくなっちゃう

僕はピエロ 笑わせるのが仕事だよ
ここが新しいステージかな？
路地裏で雨に打たれてる

お客さんはどこなんだろう？

僕はピエロ 僕はピエロだったはず
みんな僕に見向きもしない
僕はピエロなんだよね？
でももう必要ないみたい

僕はピエロ 大きな車がやってきた
ぶん投げられて車に乗った
次はどこに行くのかな？
みんなを笑わせなくっちゃね

僕はピエロ 僕はピエロ
僕はピエロ 僕はピエロ
僕は……

桜

こんな桜の咲く頃に 僕と君とは出会ったね
こんな桜の咲く頃に 僕と君とは始めたね

こんな桜が散る頃に 僕と君とはデートして
こんな桜が散る頃に 僕と君とはキスをした

桜の下で 見る君は
桜色の 頬をして

桜の下で 笑う顔は
桜の花より 綺麗だった

再び桜が咲く頃に 僕と君とはあの場所で
再び桜の花を見て 去年と同じく歩いてた

同じ桜の花を見て 贈り物して笑いあい
同じ桜の木の下で 1周年を祝ったね

桜の下で 君は時計を
桜の下で 僕は服を

互いに相手に渡しては
顔を見合わせて笑ったね

何の約束もしてないけれど
なぜか贈り物を買っていた

そんな偶然が嬉しくて
お互いが特別な存在に思えた

今でも桜を見ると 思い出す

あの時の君との事を 思い出す

あの季節はもう 戻らない

あの頃の君は 戻らない

それを知っては いるんだが
桜を見ると 思い出す

自己投影

「自分を嫌いな人間が人に好かれるわけがない」

そう思っていたが、果たしてそうだろうか？

その言葉自体は真実だ。しかし、その順序は正しいのだろうか？

人は、どうやって自分を好きになる？

自分の優れている部分は、どうやってたから見つかる？

それはおそらく相対的評価だろう。

他の人と比べてどうか？どこが優れているか？そこを好きになるの
だろう。

では、それはどうやってたら見つかるか？

人が、自分自身を見ることは、なかなか難しい。

よく言われることだが、他者という鏡を通して自分を見ることがほ
とんどだ。

つまり、自分の優れている部分は、人に認められて初めて気付くの
だ。

人に言われて初めて気付くのだ。

人にほめられて初めて気付くのだ。

だから、まず人に認められなければならない。

次に自分の良い部分を知り、自分を好きになり、そしてそれが精神
的に良い方向に働き、他の人にも好かれる人格が育まれるのだろう。
ポジティブ・スパイラルとでも言うべき現象が起こるのだ。

ならば僕は他者を認めよう。

他者をほめよう。他者を好きになろう。

そうすれば、他者もまた、僕の良いところを探してくれるだろう。

認めてくれるだろう。
ほめてくれるだろう。

もし自分の周りが良き人でないならば、他の人を探そう。
この広い世界に良き人が存在することを信じ、探し求めよう。
それは誰のためでもない。自分のために。

フラクタクル鉤針

ささくれだった僕の心は、
さながら鉤針のような触手で、
柔らかなふりをして僕の内部を傷つける。
傷つけて、引つかいて、離れようとしない。
だってそれは鉤針みたいな形をしているから。

その鉤針はフラクタクルで、微小部分も鉤針で、
全体としてみると大きな鉤針になっている。
見た目は滑らかで柔らかかそうなんだけど、
実はそのどこにも滑らかさはなく、触れると確実に傷つけられる。
すぐに死に至るような傷ではなく、でも少しずつ、少しずつ、
死に向かって少しずつ確実に蓄積するダメージを与える。

僕の心全体ははるかに拡大したフラクタクルで、
一見柔らかかそうだけど、でもそれはやっぱり鉤針だから、
その心をもつてして他者と接する僕は、
一見優しそうだけど、実は他人を傷つけてる。

ささくれだった僕の心は、ささくれだった僕の全身は、
自分だけでなく誰かを傷つける存在になっている。
フラクタクル鉤針。
傷つける存在。

自信がないから

君の些細な表情で、僕の心はたやすく折れて、
君の何気ない一言で、僕の心は儂く崩れ、
君のちよつとした仕草で、僕の心は悲しく染まる。

何をすれば君は喜ぶのか？

何をもらえば僕は喜ぶのか？

分からないから何もしない。

分からないから何もできない。

怖いから。

失敗した時が怖いから。

君を失うのが怖いから。

怖いから何もできない。

「傍にいてだけでいい」と彼女は言う。

その顔は、とても悲しそうで、

傍にいる僕は一番近くでそれを見て、

僕なんか傍にいても、

意味がないんじゃないかと思う

その悲しみを消すことができないのなら、

僕の意味なんてないんじゃないかって。

きつと「彼女のため」ってのはおためごかしで、

僕はきつと「彼女に何かできた」という、

結果だけを欲しがっているだけなんだろう

自信がないから。

彼女に何ができるのか自信がないから。

彼女が僕を好いているのか自信がないから。
彼女が僕を必要としているのか自信がないから。

穴

心にぽっかり穴が開いた。
ぽっかり大きな穴が開いた。
クッキーの型で抜いたように、
ざっくり大きな穴が開いた。

その穴を見た友達が、

「おい、それ、どうしたんだよ」と、
その穴を埋めようとしてくれた。
いろんな物をもってきて、
型にはめようと苦心した。

でもその穴の壁からは、
どくどくと血が流れてるから、
何か詰めようとするとはどくしみる。

「もういいよ」と僕は言つて、
もうそのままにすることにした。
穴の開いたままで暮らすことにした。

しかし穴に何か詰めないと、
そこを吹き抜ける冷たい風が、
ひどく痛覚を刺激した。

友人の持つてきたものは、
どれ一つとして合わなかったから、
自分で埋めなきゃいけないんだろう。
自分で埋めるべきなんだろう。

ぴったりと合うものはないかもしれない。
ぎこちなく嵌まるものならあるかもしれない。
それをなんとかそこに詰めれば、
やがて傷口もくつつくだろう。

そうしてできた僕の心は、
もはや昔の僕の心じゃないけれど、
そうやって人は生きていくのか。

しかしながら、失われた僕の古い心は、
もう二度と戻ってこないんだ。

思い出

昔好きだった人の思い出残る電車なんて、乗りたくはないさ。
今でも好きな人が住む町の駅になって、止まりたくはないさ。
あの人と一緒に歩いた街中さえ歩きたくないし、
あの人と一緒に行った公園だって目にしたくない。

いつかそれが本当に自分の中でどうでもいいことになった時、
それに対して喜びも、悲しさも、温もりも、切なさも、
楽しさも、侘びしさも、寂しさも感じなくなった時に、
ふと、気づいたらその場所において、ふとした拍子に思い出せればい
い。

ただ懐かしいなあって。

ああ、この場所で、自分の人生のある時期があったなあって。
青春と呼ぶのか恋愛と呼ぶのか、僕は知らないけれど、
そんな楽しくて儚くて甘酸っぱい時期があったなあって。

そう思うだけの場所と機会になればいいと思うよ。
そうなってないなら、行っちゃいけないんだ。
行って、その頃の自分を汚しちゃいけないんだ。
それが思い出になるのを、意識せずに待つ。
それって、結構素敵なことだと思うんだ。
僕は今からそれが楽しみで仕方がないんだ。

待ち人

人を待っているんです とても素敵な人なんです

その人のことを考えると ほかがことが手につかなくなる
そんな素敵な人を待っているんです

ただベンチに腰掛けて その人を待っているんです

音楽を聴きたくはないのです 本を読みたくもないのです
ただその人のことを考えながら その人を待っていたいのです

寒くはありません 暑くはありません

たとい寒くてもいいのです たとい暑くてもいいのです

その人のことを考えていると 暑さ寒さは感じません

そんなささいなことは感じません

考えながら待っているだけで とてもとても幸せなのです

実はその人は知りません 僕が待っているのを知りません
もしこのことを知ったとしたら 僕を気味悪がるでしょうか？

でもきつとその人は そんなことはしません

そんなことをしないから とても素敵な人なんです

僕のことなどつゆ知らず 今も仕事をしています

出会った時が楽しみです 驚く顔が目に浮かびます

そんなことを考えながら 人を待っているんです

そんなことを考えるだけで ただ僕は幸せなのです

野暮な電話はしないのです 野暮なメールもしないのです
お腹がすいても 気にしないのです

お腹が鳴っても 気にならないのです

目の前を たくさんの人が通り過ぎていきます

僕は独り ここに留まり 人を待っているんです

もしかしたらその人は ここには来ないかもしれませんが

ほかの場所で仕事を終え ほかの道から帰ったのかもしれませんが
でも いいのです

その人に会える可能性だけで 僕の心は浮き立つのです

人を待っているんです とても素敵な人なんです

飼育

私は、心の中に「哀しさ」という存在を飼っている。
普段は大人しいものだ。私に近づこうとすらない。

しかし、私が孤独や徒労や寂寥や葛藤や煩悶を感じる時、その存在は足音を消して近づいてくる。

そして私を包むのだ。

優しく、柔らかく。

それは心地良いものではあるが、なにせ「哀しさ」の手には棘が生えているので、抱き締められれば抱き締められるほど、その棘が私の心に食い込む。

それはとてもとても痛い。

それはとてもとても辛い。

でも、私はそれに心を委ねるのだ。

私が狂ってしまわないように。

私が生きていけるように。

黒っぽい血が傷口からドクドクと流れ、その流れが止まってから、私はそっと、「哀しさ」から離れる。

そして立ち上がるのだ。

未来を信じて。

違和感

友人とおもしろおかしく談笑している時に、ふと、違和感を感じることはないかい？

急に、心が冷めていくことはないかい？

不意に、自分と友人たちとの間に大きな溝がある気がしたことはないかい？

それは、なんら不思議な事じゃないさ。

それを感じた君が、本来の君なんだ。

君自身と君を包む環境とは、なかなかぴったり合うもんじゃない。

サイズの違う服を着た時のように、どこか居心地の悪さを感じるはずさ。

もしそれが、耐えきれないほど不快ならば、君の取り得る道は二つ。服に合わせて自分の体型を変えるか、新しい服を買いしかない。

どっちも利点と欠点がある。それを厭うなら、裸で暮らすしかないのかもね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3944b/>

詩集：哀しみの河

2010年10月10日15時14分発行